

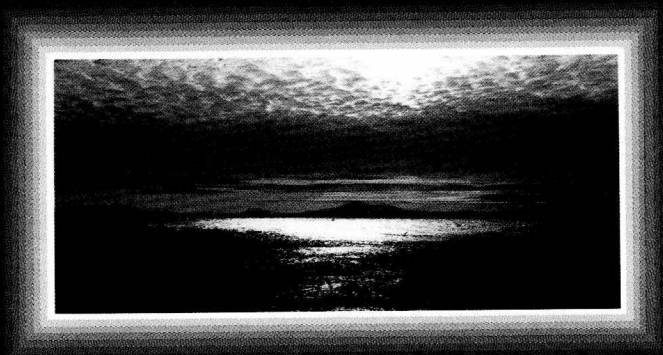
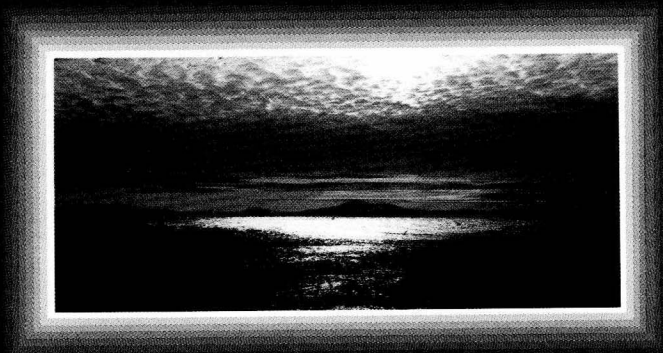


川田弥一郎

Yaichirō Kawada

白い狂気の島





白い狂気の島

一九九三年七月二五日 第一刷発行
一九九三年八月一〇日 第二刷発行

著者 川田弥一郎

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一一二〇一
電話 (〇三) 五三九五―三五〇五(編集部)

(〇三) 五三九五―三六二二(販売部)

(〇三) 五三九五―三六一五(製作部)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



1500円

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本に
ついてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あて
にお願いたします。本書の無断複写(コピー)は著作
権法上での例外を除き、禁じられています。

© Yachiro Kawada 1993 Printed in Japan

白い狂気の島 目次

プロローグ	第一章 発病	第二章 混乱	第三章 戦闘	第四章 再会	第五章 捜査	第六章 清浄	エピローグ
.....							
5	10	54	108	159	220	284	331

装帧
辰巳四郎

白い狂気の島

プロローグ

本土行きの最終連絡船は島の南港を午後五時三十五分に出航する。

その四十分前になって、岩淵元吉の息が止まりそうだと、元吉の妻やゑから診療所に電話がかかってきた。

昼過ぎに窪島典之が看護婦の江上なつと二人で往診に行った時には、元吉の呼吸や脈拍はまだ一応のリズムを保っていて、たぶん明日の朝までは大丈夫だろうと、やゑに話してきたのだった。その予測は外れてしまった。

江上なつが、診療所の床を拭くモップの手を休めて、曇った表情で窪島の方を見詰めている。「だめなようだ。行ってくるよ」

窪島は江上に告げた。

「すみません。私は……」

江上は血色のいい丸顔を強ばらせ、視線を床に落とした。

彼女は本土の持瀬町から片道四十五分かけて連絡船で診療所に通勤している。今から往診に付き合っていたのでは、夫や子供の待つ本土には帰れなくなってしまう。

「いいよ。特別の処置をするわけではない。一人で十分さ」

江上が手早く、黒の往診靴の準備をしてくれた。窪島は左手に靴を持って、診療所を出た。

診療所の前が舗装された海岸道路で、ゆっくりとカーブして島の南端の崖の手前まで続いている。黒い漁網が並んで干された堤防の向こうが島で唯一の海水浴場だった。陽は西の水平線上の空に傾いて、海岸道路に沿って立ち並ぶ民宿、旅館、食堂などの木造の建物の二階の壁をみかん色に染めていた。

診療所の隣りの空地に停めておいた軽自動車に乗り込んで、海岸道路を南へ走った。息が止まりそうというやゑの言葉に気が急いた。一年間看病を続けてきた彼女の氣持を考えると、何とか臨終には間に合ってやりたかった。

崖の手前を左に曲がって、密集した民家の間を通り抜けると、すぐに南港の連絡船発着場に出た。釣り客が五人ほど金属のベンチに寝転がって夕日を浴び、最終船の改札の始まるのを待っていた。道は北へ向かい、次第に狭くなり、傾斜が強くなって、古びた寺の門の前で途絶えていた。

この先はもう山道である。窪島は、誰かが薄茶色の中型犬を繋いでいった椿の木の手前に車を止め、往診靴を持って、細い山道を駆け上がった。背の高い緑の雑草の葉先や、薄の白い穂が、顔や手に当たり煩わしい。突き出た石に足を取られて、転びそうにもなった。

森の入口の平坦な場所まで来て、草はやつとまばらとなり、里芋、ねぎの畑が広がっていた。畑の奥に古い木造の家がひっそりと建っている。灰色の縦のはめ板は数カ所で外れかかり、一部では穴も開いている。薄闇に包まれたその家の前で、茶色のもんぺ姿の岩淵やゑが窪島の到着を待っていた。

八十歳の岩淵元吉は、玄関のそばの、昼間は日当たりのいい部屋に寝かされていた。掛け布団から顔だけをのぞかせている。窪島は息を切らせて布団のそばに坐り、元吉がまだ呼吸をしていることを確認して安堵した。

しかし、口は開き、顎は上がっていて、その顎が七、八秒に一回動くだけの弱々しい呼吸である。脈も弱く、瞳も開きかかっている。死はもうすぐそこに迫っていた。

この家に以前住んでいた一人暮らしの老人は一年半前に亡くなり、しばらくは空家になっていた。元吉とやゑの夫婦がこの家に住むようになったのは、まだ一年前のことにすぎない。元吉夫婦は八年前に、漁業をやめて本土の運送会社の運転手になった息子夫婦に連れられて、一旦はこの島を出ていった。だが、二年前に元吉が脳梗塞で倒れて半身不随となり、島で死にたいとの元吉の希望で、元吉とやゑの二人だけで島に戻ってきたのだった。

この一年、やゑはあまり窪島を呼んではくれなかった。本土の病院での検査や注射に懲りていて、余計なことをしてほしくないという思いが強いようだった。元吉はトイレ以外はほとんど寝たきりの状態だったが、やゑは小柄な体で、畑仕事のかたわら、りっぱに一人で看護をやっていた。

五日前、やゑが久しぶりに診療所に電話をかけてきた。元吉が熱を出して、食事を全く受け付けないと訴えた。

言葉も体も不自由な元吉から詳しい事情を聞き出すことは難しい。窪島は最初、風邪か軽い肺炎ぐらいかと考えて、ブドウ糖と抗生物質の点滴で治療を試みた。

一昨日、突然痙攣が始まった。熱は下がらず、体から手足にかけがたと震わしている。脳梗塞の再発か、出血でも起こったのか、それとも脳炎か。いろいろ原因は考えられても、CTス

キヤンなどの精密検査をしてみなければはっきりした診断はつかない状態だった。

本土の公立持瀬病院へ移送することを一応やゑに勧めてはみた。予想通り、丁寧^{ていねい}に札を言われて断^{ことわ}られただけだった。元吉の病状の進行は急速で、昨日からは意識をなくして昏睡^{こんすい}に陥^{おちい}っていた。いくら呼びかけても答えは返ってこない。

昼間、江上なつが元吉の腕の血管に入れてくれた点滴の残りがゆっくりと落ちている。窪島は強心剤と呼吸促進剤のアンブルを切り、点滴の回路から打ち込んだ。

何の効果もない。呼吸はさらに弱々しく、間隔^{かんかく}が延びていくばかりだった。

元吉の肩が動き、顎^{あご}が大きく上下した。それっきり呼吸は止まってしまった。

「おばあちゃん。亡くなられたよ」

窪島はやゑの肩に手を置き、臨終を告げた。

やゑは元吉の手を握って名前を呼び続けている。

窪島は一人で外に出ていった。しばらくは、やゑを元吉と二人きりにしておいてやりたかった。

台風の通過以来めっきり涼しさを増した島の風は、夜の山では一段と冷たく、汗の出てしまった窪島の体に、白衣を通して染^しみ通った。

軒下^{のきした}に垂れ下った蛍光灯と、元吉の部屋の電灯の灯^{あか}りが、家のまわりの畑と、裏の森を照らしている。森の木々のぼんやりとした輪郭^{りんかく}が浮かび、その向こうは完全な闇^{やみ}だった。風が木々の枝葉を揺らして、ざわざわと森が鳴っている。暗い森の入口から今にも何か異形^{いけいよう}のものが飛び出してきた。霧^{かみ}気^きで、都会育ちの窪島は気味が悪かった。そういえば、やゑは夜は畑の中を狐^{きつね}がうろついていると言っていた。

頃を見て、窪島は元吉の遺体のそばに戻った。小柄なやゑは元吉の頭の横にちょこんと坐つて、小さな声で念仏を唱えていた。

「きれいにしてあげましょうか？」

やゑは涙を拭つて頷き、台所から湯の入った洗面器とタオルを持ってきてくれた。

窪島は遺体の寝巻の前を開き、濡らしたタオルで前胸部から腹部、大腿部へと丁寧に拭いていた。

前面が終わると今度は背中だった。窪島は遺体を横向きにしてやゑに両手で支えてもらった。やゑが熱心に看病して、一日に何度も体の向きを変えてきてくれたおかげで、寝だこの見当たらぬ、きれいな背中であつた。十分に拭き、尻から大腿の裏側へと向かった。

左の大腿の下の方で、膝の裏側から数センチほど上方に、薄紫色の線状に変色した部位が二カ所見えた。何かの傷の痕らしい。大きな傷ではない。前面からは見えない場所なので、こんな傷痕があつたことはこれまで気が付かなかつた。

「これは何の傷だったんです？ おばあちゃん」

「さあ、私は最近そこひの具合が悪いので。おじいさんはちつとも喋らんし……」

やゑは上から覗き込んで首を捻っていた。

窪島は遺体の清拭を続けた。

第一章 発 病

1

十月六日、水曜日。

郵便局に書類を出しにいったはずの江上なつが、両手に買物袋をぶら下げて診療所に戻ってきた。

「やっぱり、台風が来るそうです」

「いつ？」

窪島は書類書きの手を休めて尋ねた。午後三時を過ぎていた。

「明日の昼頃から、雨が降り出すだろうって」

今度の台風のことは三日前から聞いている。大型で風の強い台風、このまま行けば数日で日本に接近すると、その時のラジオは報じていた。

「風は弱まった？」

「いいえ、全然」

「船が長く止まりそうだね？」

「ええ、二日か三日ぐらい」

また島が閉じこめられてしまうのか。たちまち、窪島の憂鬱ゆううつが広がった。

「私は来れません。すみません」

「いいよ」

江上一人を責めたところで始まらない。小中学校の教師達の五分の四は本土からの通勤者で、ほかの公共施設も似たようなものである。船が止まれば、学校も役場支所も、休み同様になってしまう。本土から通勤可能ということも、こういう時には、島の人間にとって不便なものだった。

診療所の入口のドアが開く音が聞こえた。江上なつが待合室を通って走っていった。すぐに中年の男が待合室に姿を現わした。後ろに彼の妻が付き添っていた。平波雄一郎という南港の近くに住む五十歳の漁師だった。

平波雄一郎は江上の指示で待合室で体温を計っていた。そのあと、だるそうな足取りで診療室へ歩いてきて、椅子に腰掛けた。日焼けした赤銅色の頬ほがさらに紅潮し、いかにも熱がありそうである。

「三十八度五分です」

江上が体温計を振りながら窪島に告げた。

「どうしました？」

窪島は診察椅子に坐り、雄一郎と彼の妻成江なるえとを等分に見て尋ねた。

「風邪を引いたらしいんです」

口をきくのも大儀たいぎそうな雄一郎に代わって成江が答えた。

「どんな症状があります。咳せきが出ますか？ 喉のどが痛いですか？」

窪島は雄一郎の精気のない目を見て尋ねた。

「頭が痛い。左の肩の辺りあたが痛い。喉も少し痛い。咳は出ない」

雄一郎はうつむきがちに低い声で答えた。

「だるいですか？」

「だるい！」

声が少し強くなった。

「いつからですか？」

「昨日からだ」

「お父さんはこれまで熱なんか出したことがないんです。だから、すっかりまいっちゃって」

肉付きのいい大柄な体格の成江が、後ろから平べったい感じの顔を突き出して言った。

確かにこの頑強な漁師が全身の病気で弱っているのは見たことがない。平波雄一郎は漁師の中では比較的良好な診療所を利用する方だったが、その理由は船で怪我けがをしたとか、山でマムシを捕まえた時に咬かまれたとか、犬にちよつかいを出して逆襲されたといった外傷に限られていた。マムシで手が腫はれてしまった時も平然としていたほどの男である。

窪島は雄一郎をベッドに寝かせて診察した。

ハンマーで膝たかを叩いた時の反射が少し亢進こうしんしているようだった。それ以外にとくに異常は見当たらなかった。

両腕には、勲章のように様々な傷の痕が残っていた。痛いのは左の肩から肘ひじにかけて。その部分が特に腫れている様子はない。傷痕が新たに化膿してきたような徴候もない。

隣りのレントゲン室へ連れて行って、胸と肩の写真を撮^とってみた。すぐに現像してみたが、肺炎や骨の異常を疑わせるような影は見当たらなかった。

テープによる尿検査でも異常なし。

「どうでしょうか？」

診察室に戻ってから、成江が尋ねた。平べったい顔の中で、肉厚の唇が目立っている。

「たぶん風邪だと思いますね。点滴をしておきましょう。肩の痛みは風邪でも起こりますが、五十肩や神経痛かもしれません。湿布をしておきましょう。風邪以外の病氣、たとえば肝炎のような可能性もありますが、それは血液の結果が出ないとわかりません。三日後にわかります」

窪島は一語一語はつきりと説明した。

内心では気になる点がない。この前の台風が通過して急に涼しくなったため、島にも風邪の患者が増えてはいたが、彼等の主な症状は咳と喉の痛みだった。雄一郎の症状はちょっと違う。

とはいっても熱や頭痛や肩の痛みも一般的には風邪の症状には違いない。胸の写真に異常がなく、手足の麻痺^{まひ}もない以上、とりあえずは風邪と考えて問題ないのではないか。

「先生、台風」

江上なつが心配そうに口を挟^{はさ}んだ。

「そうそう、台風が来ると検査の結果は遅れますよ。しかし、まあ、風邪も肝炎も安静が第一です。点滴が終わったら、家に帰って静かに休まれるのがよいでしょう」

「そうですよね、私も風邪だと思っていました」

成江は納得^{なつとく}したように頷いた。

一時間ほどで点滴は終わった。

「楽になりました？」

江上なつがベッドに近付いて雄一郎に尋ねた。

「ああ、体はちよつとよくなった」

江上が点滴の針を抜き、雄一郎はアルコール綿を押さえて、ゆっくりと起き上がった。

「明日も必ず来てください。私は本土へ行くつもりですので、朝早くお願いします」

窪島は診療椅子を回転させ、机に向かって解熱剤などの処方箋を書き始めた。

「先生！」

背中呼び掛けられて、窪島は振り返った。

雄一郎が不安げな目で窪島をじつと見た。

「体はだるいのには頭は冴えていいる。いらいらするんだ。うまく言えないが……何か落ち着かないんだ」

「落ち着かない？」

「大きな音がするとびくつとしてしまう。神経過敏になっているのかもしれない」

「熱のせいですよ、お父さん。先生も風邪だと言っていらつしやるし。帰って寝ましょう」

そう言つて肩を差し入れた成江に支えられ、雄一郎は待合室の方へ引き上げていった。

雄一郎の不安に感染して、窪島も急に不安になってきた。

ふと、八日前に亡くなった山の家の岩淵元吉のことを思い出した。

元吉は脳梗塞の後遺症のため自分の苦痛を言葉で上手に表現できず、病像がつかみにくかったが、悪くなった最初の症状は発熱だった。